

座長／新百合ヶ丘総合病院／谷 諭  
／慶應義塾大学スポーツ医学研究センター／石田浩之

スポーツ医学の分野で脳振盪への取り組みをしっかりと議論すべきという機運が国際的に高まったのは2000年代に入ってからである。アメリカンフットボール、ボクシングなどの競技において、繰り返す脳振盪に起因すると推測される重篤な後遺症事例や死亡例が相次いで報告され、また、一部のケースが訴訟問題に発展したことも背景にある。これを受けて2001年11月に第1回国際スポーツ脳振盪会議 (International Conference on Concussion in Sport) がウィーンで開催された。以降、ほぼ4年に1回の頻度でこの会議は開催されるようになり、その都度、会議からの声明 (Consensus Statement) が発表されている。直近では2022年10月に第6回の国際会議がアムステルダムで開催され、同会議の声明が2023年7月に発表された (British Journal of Sports Medicine 57, 2023)。毎回、この会議から出される声明はスポーツにおける脳振盪のガイドライン的位置付けとなり、国際的にもインパクトが大きいだけでなく、特にコンタクトスポーツに関わるスポーツ医は是非とも知っておくべき情報である。今回のシンポジウムではアムステルダム会議に参加された先生方を演者としてお迎えし、それぞれの専門分野の立場から同会議での議論の内容も踏まえた発表をお願いした。

シンポジウムではまず、東邦大学医療センター大橋病院の中山晴雄先生から、アムステルダム声明の概要をご説明いただいた。現在、脳振盪の評価ツールとして普及している Sports-Concussion Assessment Tool-5 (SCAT5) や Concussion Recognition Tool-5 (CRT5) がそれぞれ SCAT6, CRT6 に up-date されたこと、また、新たに受傷後72時間以降の使用を前提とした Sport Concussion Office Assessment Tool-6 (SCOAT6) が公開されたこと、ならびに、段階的競技復帰プログラム (Graduated Return to Play Protocol: GRTP) に一部追記がなされたことなどの情報が提供された。聖隷三方病院の佐藤晴彦先生からは、フィールドにおける脳振盪を扱う立場から、今回の会議のメジャー変更とも言える SCAT6 を中心に紹介いただいた。SCAT6 の使用は受傷後72時間以内の評価を理想とする時間軸が明記されたこと、また、Child SCAT の適用は5が5-12歳であったのに対し、6は8-12歳に変更されたことが報告された。佐藤先生は合同声明の策定に関わる expert panel のメンバーであり、その公開に至る経緯もご紹介いただいた。流通経済大学の山田陸雄先生はリハビリテーション専門医の立場から SCOAT6 の話題を中心に発表いただいた。SCOAT6 は今回のアムステルダム会議で新たに提案されたツールである。脳振盪後、72時間以降に残存する種々の症状を網羅的に評価することを目的としており、スポーツ現場復帰だけでなく学校生活や社会生活復帰も視野に入れた広範な評価ツールであるため、Office (医務室) のような環境での評価を想定しているとの説明がなされた。また、GRTP の変更点として、受傷後の休養を経たのち、症状がなければ早期に軽度の有酸素運動がリハビリの一環として組み入れられたことが紹介された。桐蔭横浜大学の犬塚奈先生は脳振盪の啓発活動の分野で多くの業績があり、教育現場視点での脳振盪への取り組みについてお話しいただいた。部活や教育現場では、脳振盪が深刻なものであるという認識が未だ十分に浸透しておらず、報告として上がらないケースも多いという話はインパクトがあり、脳振盪対応の現場実装の難しさを感じるものであった。現場を預かるトレーナーの立場からは筑波大学大学院の中本真也先生に発表いただいた。脳振盪がフィールドで起きた際、必ずしもドクターがいるとは限らないので、初期対応におけるトレーナーの役割は極めて重要であり、SCATをはじめとした評価ツールの習熟はもとより、競技復帰に向けたGRTPの実施においては中心的役割を担うこと、また、GRTPでは様々な手法や確認検査が必要であり、そのためには多職種連携が必須であることを、海外での経験も踏まえ強調された。

質疑においてはSCAT6の現場運用や5からの切り替え時期について多くの意見が出された。現場運用については5同様、日本語訳の出版を待つべきであるが、6の原文には日本での適用に馴染まない英語表現もあることから、当面はSCAT5を使用することが現実的との提案が演者よりなされた。脳振盪の対応は個

別性が高いがゆえ経験の積み重ねが重要である。本シンポジウムはエキスパートが集まる国際スポーツ脳振盪会議に出席された経験豊富な演者の方から、up-dateな情報が得られた貴重な機会になった。ご多忙にもかかわらず、ご発表いただいたシンポジストの皆様にご心より深謝の意を表す次第である。